学校だより
第28号
令和８年度

いつも心にあいうえお

令和８年　9月30日（水）
発行：那覇尚学院高等専修学校
文責：校長　初鹿野修

一人一人のよさをとらえて

「太郎さんのクラスの人数は、４０人です。体育の時間に運動帽をかぶりました。帽子は表が赤で裏が白。２５人が白い帽子をかぶったら、赤い帽子の子は何人になりますか」

さて、みなさんはどう計算しますか？　うーん、算数の問題だと考えると・　40−25＝15　１５人

１５人。通常は正解です。間違いありません。

「今日は、帽子を忘れた子はいないのかな。」「もしいるとすれば何人だろう。」・・そんなことを考え出して、答えが出せない。

普通の見方からすれば、おかしな考えであり、こんなことは考えないだろうと普通は思います。こんなとき、上記のように考えた子は、教師に問い詰められると「よくわかりません。」というか、「たぶん、１５にんかもしれません」と答えるかも。少し、「あれ？」と思うし、「おかしいな？　やっかいだな」ということになるのだと思います。
しかし、現実には帽子を忘れてくる子が、ほとんどのクラスにはいるので、問題条件から思い悩むことのほうが、いわばまともなのかもしれません。独創的に何か新しいことを考え、新しい発想を生み出す子は、こんな子なのかも。エジソンなどもこんな子どもだったのではないでしょうか。

誤答の持つ真実は何なのか、考えさせられてしまいます。思考の深さ？が違うのでしょうか。一つは、みごとな視点の転換です。帽子の総和、減数の白帽、差は赤帽とする思考様式に対して、もし忘れ物があったならとする忘れ物から問題構造を概観し、問題条件を考えようとする視点の転換がたいへん興味深いことです。二つ目に、思考の転換の見事さです。起承転結は文章を書く重要な要素とされ、「転」は問題点をよりひきたて、明確にする効用ががあるとされます。転ずるときは置き換えることであり、絵空事の計算問題を忘れ物という現実に置き換えての力量はすごいものだと思います。

「誠実で勤勉で真面目な人間が、そろそろ企業にとってやっかいな存在になりつつある」とは、堤清二氏のことばで、なんとなく符合して考えさせられます。十人十色。一人一人のよいものをとらえることの難しさを思わずにはいられません。本校では、教職員３人が前向きに２人の生徒と接し、一人一人を理解しようと努めています。理解したつもりにならず、これからも「きく」ことを中心に、より理解を深められたらと思っています。

私たちの教材園



この白いものは何でしょうか？
・だいこん？

教材園に植えて、実ったものです。
これで、４本目の収穫です。３本は夏休み中でした。
実は、**きゅうり**です
ホワイティー25という種類です。おもしろいですね。こんなきゅうりもあるんです。さらに、メロンきゅうりも植えていますが、なかなか花が咲きません。メロンきゅうりは、小さくて縞模様のある丸いきゅうりです。

これから約1年、産休育休に入らせていただきます。

山城美鈴

また元気に復帰できればと思っていますので、その際はよろしくお願いします。

9月より山城さんの後任として事務を努めております。

大里明利佳

山城さんのように保護者の皆様に安心していただける丁寧で迅速な対応を引継ぎ、常に誠実な対応を心がけてまいります。まだ不慣れな点でご不便をおかけすることもあえると思いますが一日も早く業務を覚え、精一杯サポートに努めます。
これからどうぞよろしく お願いします。

